

人と自然が共に生きる、 大型水鳥類をシンボルとした地域づくり

島根県出雲市 市長
長岡秀人氏

皆様こんにちは。出雲市長の長岡秀人と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、出雲市の位置等については、案外ご存じでない方が多くいらっしゃるようですので、一応説明させていただきます(図-1)。ご覧のように、島根県の東部に位置しています。市域としては624平方km。ちょうど、東京23区と同じ面積です。そこに17万人の人が住んでおります。2市5町が一緒になりましたが、7つの自治体には自治体文化というものそれぞれございますので、その融合に苦勞をしているというところであります。

出雲といいますと、「出雲大社」ですが、60年に1度の大遷宮。今まさにその最中でございます(図-2)。平成20年から28年の3月まで、8年間に及ぶ期間が、平成の大遷宮と呼ばれる期間です。平

成25年の遷座祭というのがそのメインの行事です。その年には約800万人の皆さんが、この出雲大社においてになりました。ちょうど八百万の神様と同じ数が来られたということです。そのほかにも市内には、358本の銅剣や銅矛、銅鐸が一度に出土した荒神谷遺跡などがあり、古代ロマン溢れる歴史文化遺産の宝庫であります。

また、海、山、川、湖などの自然に恵まれ、平野もございますので、あらゆる自然が備わっています。市の中央部には、奥出雲の船通山を源とする斐伊川が流れています。かつては、そのまま日本海に抜けていましたが、だんだんと向きを変えまして、現在は、出雲平野で東に流れを変えて、宍道湖へと注いでいます。宍道湖から先は、松江市の中心部を流れる大橋川を通じて中海と繋がり、最



図-1



図-2

後は鳥取県との境にある境水道を通過して日本海に至っています。この斐伊川は、島根県の東部、昔で言う「出雲の国」のほとんどを流域とする河川で、古来より洪水を繰り返してきました(図-3)。出雲神話のひとつ「八岐大蛇」神話は、洪水と先人たちとの戦いの中から生まれたものだと言われています。また、斐伊川には、宍道湖と中海という2つの湖がありますが、これらはいずれも汽水湖でございます。連結した汽水湖というのは、世界的にも稀なもので、そういう意味でもラムサール条約湿地としての登録につながったわけです。登録からちょうど今年で10年を迎えています。現在、様々なイベントをやっている最中です。

また、斐伊川のことを話す際に忘れてならないのが、この川の上流一帯で、古くから盛んに行われていた砂鉄を製錬して鉄をつくる「たたら製鉄」です。このたたら製鉄で、原料の砂鉄をとるのに、土砂を川に流し、比重の重い砂鉄分のみを分離する「かなな流し」という方法が使われたため、下流域に大量の土砂が堆積し、出雲平野が広がっていききました。それとともに、ご覧のように市内の斐伊川は、網状砂州の発達した全国でも有数の天井川となりました。天井川ということで洪水の危険と隣り合わせというところがございます(図-4)。

斐伊川は、自然の恵み、平野をつくった反面、

洪水の歴史を繰り返しています。その斐伊川を何とか治めようということで、現在、この川では、「平成のおろち退治」とも言われている、大規模な治水事業が行われています。5千億円に及ぶ工事費をかけて治水事業を展開しているところです(図-5)。この事業は、河川の上流、中流、下流でそれぞれ機能を分担することから、「3点セット」と呼ばれています。まず上流では、この斐伊川と市内を流れるもうひとつの大きな川である神戸川の上流にそれぞれダムを造り、この2つのダムで洪水時における下流への流量を調整し、両河川の治水の問題を一度に何とかしようというものです。そして、中流部にあたる出雲市内には、この2つの河川を結んだ斐伊川放水路があります。これは人工的な

天井川となって流れる斐伊川



図-4

斐伊川流域の地勢・地形



図-3

斐伊川・神戸川流域の治水計画



図-5

バイパスで、斐伊川が氾濫して増水したときに、その洪水の一部を、神戸川を経て直接日本海に流すようにしたものです。この両流域のダム2つと放水路の工事は、すでに完成しています。今年度、幸いなことにこの分流が行われることはありませんでしたが、平成25年6月に斐伊川放水路が完成してから、これまでに3回の分流が行われています。分流することによって宍道湖の水位を下げる。それが結果的に平野全体の被害を回避するという効果を発揮しております。現在この治水事業の中心は、最後に残った下流部の大橋川の拡幅による改修や中海・宍道湖の湖岸堤整備などに移っています。この3つの事業によって、治水を完結しようということでもあります。今、残された大橋川の拡幅事業のためにいろいろと努力をしているところです。

さて、氾濫を繰り返してきたこの斐伊川ですが、一方で地域に大きな恵みをもたらしています。上流域では先ほどお話ししましたように、一大産業となったたたら製鉄を支え、中流域ではこのように度々流路を変えながら出雲平野を形成して、地域に豊かな実りをもたらしました。川がどんどん変わってきたということですが、松江藩の新田開発の土木技法のひとつで、川を変えることによって新田ができていったということでもあります(図-6)。下流

域では宍道湖、中海という全国で7番目と5番目に大きな湖が、独特の自然環境を育んでいます。

汽水湖である中海、宍道湖は、それぞれ塩分濃度の異なる汽水環境を形成しています。日本海とつながっている中海の塩分濃度は、海水の約半分。これに対して宍道湖は斐伊川の水量にもよりますが、海水のほぼ10分の1程度です。またシーズンによっても塩分濃度は変化します。こうしたことから、湖ごとに魚の種類が異なる、海の生物と淡水の生物が入り混じるといった、それぞれ異なる特色をもった多様な自然環境がつくられています。宍道湖には夕日の絶景とともに、様々な自然の恵みがございます。宍道湖のあたりで鯛が獲れたとかいう話もあります。湖を代表する魚介類は、宍道湖七珍や中海七珍などとも呼ばれていますが、中でも漁獲量日本一に返り咲いた宍道湖のヤマトシジミは、2年前に青森県の十三湖に日本一の座を譲りましたが、また復活いたしました(図-7)。地域が全国に誇るブランド品でもあります。宍道湖のほとりに、淡水魚だけを展示する「宍道湖自然館ゴビウス」という水族館があります。これがまた大変人気を集めている水族館であります。

さて、出雲市と大型水鳥類との関わりについてですが、この出雲平野から宍道湖、中海にかけての斐伊川中・下流域は、冬になるとハクチョウやガ

流路の変遷

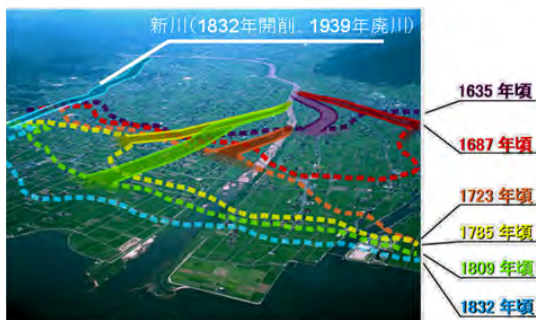


図-6

宍道湖のシジミ漁



図-7

ンといった大型水鳥がやってくる全国的にも貴重な飛来地となっています。これは、20年間に斐伊川流域にやって来たコハクチョウの渡来数を表したグラフです(図-8)。ご覧のように、元は1,500羽前後だったものが、平成15年度には2,500羽まで増え、その後は2,000から2,500羽が安定的にやって来ています。最近、宍道湖と安来市の能義平野が主な渡来地となっています。また、これはマガンの渡来数を表したグラフです(図-9)。平成19年度までは年々増加し、多いときには約5,000羽がやって来ていますが、近年は若干減って3,500羽程度となっています。このほか、同じガン類のヒシクイが毎年100羽前後やって来ています。水系の中では宍道湖への渡来が圧倒的に多くなっ

ています。

この中海と宍道湖は、多くの水鳥が生息する貴重な湿地であるとして、先ほどお話ししましたように、2005年11月にラムサール条約湿地に登録されました。宍道湖の西岸、宍道湖に注ぐ斐伊川本川の河口付近、そしてその周辺の水田等では、毎年たくさんのハクチョウやガンの群れを見ることができます。私も子どもの頃から、稲刈りを終えた周りの水田などで、羽を休め、餌をついばんでいるこうした鳥たちの姿をよく見てきました。住んでいる家の周りにも、いろいろな水鳥が来ます。結構人なつっこいと言いますか、あまり人を恐れないということがございまして、近づいて見ることができます。

この宍道湖西岸には、ホシザキ電機の先代の社長が創立されましたホシザキグリーン財団という公益財団法人があり、この財団によって整備された、人と自然の共存を目指した多自然型公園「宍道湖グリーンパーク」があります(図-10)。園内には野鳥観察舎やビオトープ等があり、近接する水田では、周辺農家の協力を得て冬期湛水も行われて、水鳥観察の拠点のひとつになっています。冬になるとこの公園や斐伊川河口などには、たくさんの野鳥愛好家がバードウォッチングに訪れています。

昨年の10月には高円宮家の次女典子様と出

コハクチョウの渡来数

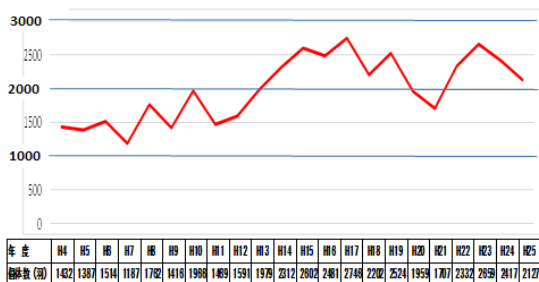


図-8

マガンの渡来数

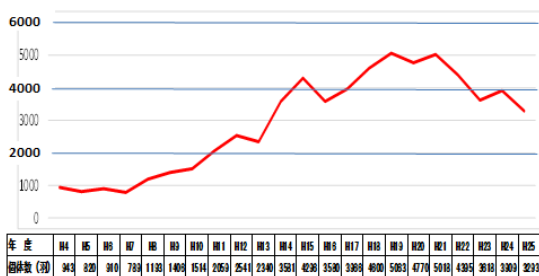


図-9



図-10

雲大社神職の千家国麿さんのご結婚がありました。地域をあげて盛大にお祝いをしたところです。お二人の出会いのきっかけとなったのが、お互いの趣味であるバードウォッチングだったということです。高円宮家の皆様も千家家の皆様も野鳥観察をされまして、冬になると各所に出かけて写真も撮られています。また、新しい種を発見されたときは報告があったりと、そういう方々でございます。「鳥たちが取り持った縁」ということで、縁結びのまちにふさわしい、大変面白い話題となりました。

また、時にはこの新聞にあるように、ナベヅルやマナヅルなどのツル類、コウノトリといった珍しい鳥がこの地を訪れ、話題となることもあります。最近は頻繁にいろいろな鳥が飛来してくるので、そう珍しいことではないという状況になっております。斐伊川水系とは少し離れており直接の関係はありませんが、出雲大社から島根半島を西に向かった日御碕にある経島は、ウミネコの繁殖地として、1922年、八戸市の蕪島とともに、全国で初めて国の天然記念物に指定されています(図-11)。このウミネコについても、毎年11月下旬から冬にかけて出雲にやって来ており、数千羽のウミネコで小さな島が真っ白になることもあります。

このように、出雲の国は、冬になるとたくさんの鳥がやって来る、鳥たちの宝庫です。ところが、地域

におけるこれまでの鳥に対する思いは、どちらかと言うと糞害や農作物に及ぼす被害などのマイナスイメージもあって、地域の資源として十分に活かされていなのが実態です。観光客なども少なくなる、冬の閑散期にやってくる鳥たちを、厄介者扱いするのではなく、共生しながら活かす地域づくりが必要であると思っています。

次に、出雲市が取り組んでいる「トキの分散飼育事業」についてお話しします。出雲市は、平成23年に4羽のトキを受け入れて、この分散飼育を始めました(図-12)。その翌年に1ペア、2羽を追加し、現在は6羽、3ペアで繁殖を行っています。飼育員の養成、飼育技術の指導や日常的な相談にいたるまで、佐渡トキ保護センターや東京動物園協会など多くの方の支援を受けながら、飼育は概ね順調に進んでいます。

出雲市のように、佐渡以外でトキを飼育する「分散飼育」は、他に東京の多摩動物公園、石川県のいしかわ動物園、新潟県長岡市の3カ所で行っています(図-13)。西日本で行っているのは出雲市だけです。分散飼育には、国内のトキの8割が集中する佐渡において、高病原性鳥インフルエンザ等が発生した場合に心配される、トキの絶滅の危険性を減少させる目的があります。また、飼育のみならず、佐渡で放鳥するトキの繁殖という役

経島のウミネコ



図-11

出雲市トキ分散飼育センター



図-12

割も担っています。

今年12日には、出雲市トキ分散飼育センターで、今年繁殖した3羽のトキの幼鳥を佐渡トキ保護センターへ移送しました。平成23年からこれまでに、佐渡トキ保護センターへ送ったトキは10羽、4羽、6羽、5羽、3羽の、合わせて28羽で、そのうち21羽はすでに佐渡の野生下に放鳥されています。出雲市と佐渡市とは、直線距離で約600km。陸路で新潟市まで行き、そこからフェリーを使うと輸送距離は900kmにもなり、実に17時間をかけて輸送しています。この距離が、感染症リスクの回避にも有効であり、出雲市で分散飼育をしている意味のひとつです(図-14)。ちなみに、出雲市で飼育するトキの親も、生れてきた子どもも国の機関、関東地方環境事務所の所有であり、佐渡トキ保護センターによって個体が管理されています。繁殖したトキは、全て佐渡で放鳥される候補個体となるため、出雲市で繁殖したトキは全て佐渡トキ保護センターに送ることになります。

これまでに放鳥された出雲生まれ21羽のうち、現在生存しているのは13羽と考えられています。生存率は約60%で、これが高いか低いかわかりませんが、やはり野生復帰というのはなかなか難しいなと感じています。一方、平成26年には、出雲生まれの放鳥トキに、初めて野生下でヒナが誕生する

という、うれしい出来事がありました。また、出雲生まれのトキが野生下で生まれたトキとペアとなり、佐渡で初の野生3世を誕生させました。出雲生まれのトキが、野生復帰に大きな貢献をしていることを誇りに思っています。まさに縁結びの神・出雲大社のあるまちの代表としての面目躍如といったところです。今後も、「トキ野生復帰ロードマップ」に従って、放鳥候補個体を供給するなど、国のトキ保護増殖事業に貢献して行きたいと考えています。

日本で野生のトキが最後まで生息していたのが佐渡です。それより前、本州最後のトキは、石川県能登半島に生息していました。さらに遡ると、島根県の隠岐の島で絶滅したのが昭和20年だと言われています。出雲地方には、大正期に「宍道湖にトキ、ハクチョウ来る」との記録が残り、このように、出雲国産物帳にも、トキについての記載があります。トキを「紅鶴」と書いていたようです(図-15)。そのほか「牛からす」、「白からす」は、いずれもトキの方言だったようです。それが江戸時代の話で、昔は、日本各地にトキは普通の鳥として生息していたようです。

さて、出雲市がトキの分散飼育を始めたのは何故か。その背景には、平成8年に友好都市協定を締結した中国の漢中市との交流があります。漢中市にある洋県は、当時、中国でも絶滅したと思わ

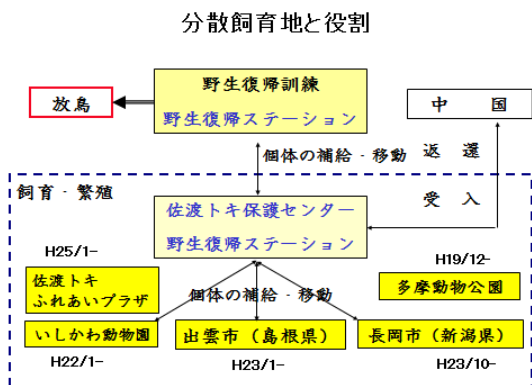


図-13



図-14

れていたトキが、1981年に再発見された地です。漢中市との交流のなかで、平成12年からは「陝西トキ救護飼養センター」のトキの飼育支援、「認養」を行ったことなどで、徐々にトキへの関心が高まり、平成17年には、「NPO法人いずも朱鷺21」が設立され、市民のなかに、是非出雲でもトキ保護に協力をという機運が盛り上がり、トキの分散飼育を行う契機となりました。

トキによるまちづくりを進めるために、行政や市民団体、JAなど、各種団体からなる「出雲市トキによるまちづくり協議会」を組織し、平成23年には「トキによるまちづくり構想」を策定しました。安全・安心な住みよい出雲市を目指し、トキをシンボルとした環境のまちをアピールしたいと考えているところです。まずは、トキそのもの、そしてトキ保護増殖事業への理解を深めるため、マスコットキャラクター「ミコトッキー」の作成・活用や、平成23年にオープンした「トキ学習コーナー」などで、出雲市の取り組みや佐渡市の取り組みも紹介しています(図-16)。

現在、佐渡で放鳥されたトキが1~2羽石川県で確認されています。また、本州から佐渡へ帰ったトキもいます。佐渡でトキの生息数が安定すれば、自然と本州への生息範囲も広がるのではないかと期待しています。お話をうかがうと、残念ながら

日本海を渡って本土へ遊びに来るトキは全部メスだということで、もう少し勇気のあるオスに来てほしいなと思っております。島根県、出雲市まで飛んで来るには時間がかかるかも知れませんが、出雲で生まれ育ったトキがしっかりと佐渡で繁殖し、その子孫が出雲へ飛んできてくれるよう願っているところです。出雲市の取り組みはまだ道半ばですが、佐渡市をはじめ多くの先進事例に学びながら、市民とともにトキと共生できる地域をつくっていききたいと考えています。

さて、そんな思いを強く抱いていたところ、今年、斐伊川を管轄管理している国土交通省出雲河川事務所が中心となり、「斐伊川水系 生態系ネットワークによる大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会」が立ち上がりました(図-17)。協議会の会長は、ここにおいでの上野先生でございます。斐伊川水系は大型水鳥類が安定的に生息可能な潜在性を持つ、大変貴重な地域であることに着目し、その鳥を指標とし、河川を軸にした水辺環境の保全・再生と地域経済の活性化が両立できる生態系ネットワークの形成を目指して行くことにしました。当初、この取り組みは、出雲市のエリア内からということでありましたが、鳥にとって市境、県境も全く関係ないということで、また、鳥たちは宍道湖・中海圏域を含めた広い範囲に集まって来

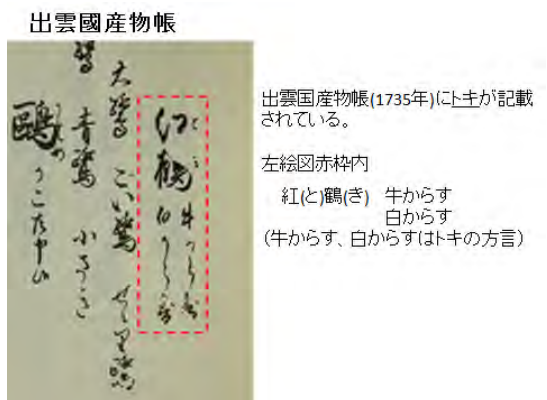


図-15



図-16

ているという状況から、流域全体で一体的に取り組むという方向になりました(図-18)。

生物多様性や鳥類の専門家はもとより、出雲河川事務所のほか、島根、鳥取の両県、宍道湖・中海沿岸の5市である出雲市、松江市、安来市、米子市、境港市、また、圏域内のJAや漁協、経済団体などが一堂に会して、この協議会に参加しています。この5市ではすでに、県境を越えて5市の市長会「中海・宍道湖・大山圏域市長会」を組織して、圏域の共通課題に連携して取り組んでいるところでもあります。その共同で取り組むべき事業のひとつが環境でございます。世界にも希な汽水湖をもっている我々が、しっかりとこの流域の環境を守っていこうというのが大きなひとつの目標であります。そういった共通課題に取り組むなかで、生態系ネットワークの形成についても協力連携し、水鳥たちの生息環境づくり、地域の特性を活かした地域振興の取組みを進めていきたいと考えています。

協議会設立に先立って、今年1月には、ここにおいで豊岡市の中貝市長さんをお招きし、「地域の自然で人が潤う」をテーマにした「出雲の地域づくりフォーラム」を開催しました(図-19)。中貝市長さんには大変お忙しい中おいでいただき、お世話になりました。鳥を中心にして地域の持つ自然

の豊かさ、その自然や生態系ネットワークを活かした地域づくりのあり方等について研鑽を深めることができました。

こちらの取り組みはまだ始めたばかりですが、ハクチョウやガンに加え、ツルやコウノトリ、そしてトキがこの地域の空を華麗に舞う姿を思い描きながら、宍道湖・中海圏域の関係機関や市民の皆さんと一緒に、この地域ならではの資源を最大限に活かしながら、魅力ある地域づくりを進めていきたいと思っています。

月日の経つのは早いもので、すでに今年も11月後半となりましたが、旧暦で言うともまだ10月です。全国では、この10月を「神無月」と呼ぶのに対し、唯一出雲では「神在月」と言います(図-20)。実



図-18

斐伊川水系生態系ネットワークによる
大型水鳥類と共に生きる流域づくり検討協議会



図-17

出雲の地域づくりフォーラム



図-19

は丁度、明日11月21日が旧暦の10月10日にあたります。この10月10日というのが、出雲の地では出雲大社を中心に、全国から八百万の神々をお迎えする最初の日で、「神迎祭」が催行される日でございます。この全国から神様がお集まりになられる時期と相前後して、ハクチョウやガンなど、多くの鳥たちが出雲の地にやってきました。これも何かの不思議な縁かなと思っているところでございます。

皆様、是非、縁結びの地、神話のまち出雲の方へ、たくさんの鳥たちに会いに、お越しいただけたらと思っています。新たな出会い、良い縁を求めてお越しください。私どもがご縁のまちというのは、人と人、男女のご縁だけではなくて、地域、また国も含めて、多くの皆様との交流にしっかり取り組んで行く、これが私ども出雲市の基本的な使命と考えています。

今日、このような場で報告をさせていただく機会を与えていただきましたことに、深く感謝を申し上げます。また出雲の地でお会いできることを楽しみに、以上で報告を終わらせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。



図-20

